
八百万の夢

時亜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

八百万の夢

【Nコード】

N4814Y

【作者名】

時亜

【あらすじ】

夢の中でのお話です。

これは夢なのだろう。

無数の星が天翔ける宇宙の川や無限に広がる黒い海を眼下に月に腰掛けた私は思う。

流れる髪は波を打って黒い海の一部となり、私の吐息は海を渡る風となる。

ある「星」という名の船は川を渡り、海を渡る。

その途中でそれらの一部は川となり、海となる。

海は世界を構成する一部であり、そこからまた新しい船を作る。

船は川となり、川は海となり、海は世界となり、世界は船となる。

これがこの世界であり、私の世界ではない。

だからこれはきっと夢なのだろう。

自分の世界ではない世界。現実では起こり得ない奇跡もここならば起こりうる。

夢とは何か。世界なのだろうか、事象なのだろうか、現象かもしれないし現像なのかもしれないし虚像かもしれない。

多分どれでもなくてどれでもある。不完全な完全であって完全な不完全。これが多分夢なのだ。

夢を理屈で考えては意味がない。夢とは液体のようなもので理屈で固めても穴があればするりと逃げてしまうものであるから。

しかしながら夢とは知っても何をしていいのかわからない、私は思う。

無限とも思える世界の中で一人で居ることは退屈である。この世界は全て私の支配下にあるのだから話し相手を作ることとも可能ではあ

るが、話すことも話す前に分かってしまい興奮めしてしまう。
さてどうするか、と思索した時に黒い海が割れた。

その割れ目から見知らぬけれども見知っている少女が出てきた。

「あなたは誰ですか」

この世界で知らぬことなど何もないはずの私が聞いた。

「私はあなたです。そしてあなたは私です」

少女は答える。

「例えるのならばドーナツツの穴でしょうか」

「どういう意味ですか」

「ドーナツツの『穴』は何もない空間でしょう。しかしながらその空間はドーナツツの『穴』というもののなのです。そしてその何も無い空間も含めてドーナツツと呼ばれます。ならばドーナツツの『穴』はドーナツツの一部であり、ドーナツツもドーナツツの『穴』の一部ということになりますでしょう」

「しかしながら私にはそのような関係のものは無いのですが、あなたは私のなんなんでしょう。性別も、背格好も顔も違うのに私の一部とは意味が分からない」

「見た目や性格は問題ではないのですよ。本質が同じならば基本的に同じものです。例えば――」

右手で自分の顔をなぞると少女は男性になっていた。

「本質的に彼女と私、そして君も全て同じだ」

「そうですか。理解は出来ませんが分かりはしました」

夢を理屈で考えてはいけない。こういうものなのであるのだろう。理屈で考えては馬鹿を見る。

「全てを教えても良いけどそれじゃつまらないからね。じっくり考えると良いよ」

「それで退屈はしなさそうですね」

「そう。退屈はしないだろうね。もつともすぐに解るとは思っけれど」

「あなたが私ならばこの世界も私のものでありあなたのものである

のですよね」

「勿論。ただし、君と私が相反することをするとしたら君が優先されるだろうね」

「あくまでも私が中心なのです」

「そう。ただ気をつけて欲しいことはこの世界の中心は君であるけれど世界はいくつもあつてその世界から見ると君はただの個体ではないってことさ」

「ここが夢だと考えるとその通りだ。夢の中では私は世界の中心だが夢から覚めると私は世界の中心ではなくなってしまう。」

「そういえばあなた（わたし）はどの位いるんですか」

「そうだね……全てを数えることは難しいけど無限にいるってわけじゃないさ。八百万とでも言っておこうか。……うん、八百万だね。そして僕らの数だけ夢がある。ここは『八百万の夢』だ」

「……そんなにこの夢は長いのですか」

「八百万とは言ったけど時間制限はあるよ。それに覚めない夢はないのさ」

「それならば少し急いだほうがいいですね」

「かもね。1つだけヒントをあげよう。あの赤い月が見えるかい」
彼が指差した方を見ると確かに赤い月が見えた。薄い赤を身に纏い悠々と丸いそれは何故か恐ろしく感じた。

「分からないと思うけど、あの月は少しずつ近づいて来ているんだ。あの星はこの世界とは別の物だから君でも消せない。もし消えるとしたら……」

「消えるとしたら？」

「いや、意味無いな。あれが消えることは私たちが消えることと等しい。消えてしまうのならその後どうなっても変わらないだろう。死後のことなんか生者に分かりはしないのと同じさ。それに……」

「それに……どうせ消えはしないのでしょうか？」

「その通り。僕らが消えるとしてもあの月は少しずつ近づいて来る。これは避けられない」

「そうですか……とは言っても。月が綺麗ですね」とは言えないですね、アレは」

「折角の言葉だけどそれは意味が無いよ。私たちは君で君は私たちなんだからね。まあ流石にナルキッソスとは言わないまでもある程度自分を愛することは大事だよ。自分を愛せないようじゃ何も愛せない」

「それは言いすぎだと思いますね」

「かもね。ただ、愛することとは大事にすること。自分を大事に出来ない者が他人を大事に出来るだろうか？ 多分何処かに欠陥を残したまま大事にしてしまうと思うね。自分を大事にすることは生物の本能、本質だ。それがすっぱり抜け落ちているのはやはり欠陥品だと思うよ」

「でも他人の人を優先してしまう性分の人には居るでしょう？」

「まあね。だけど他人を優先しようが構わないんだ。僕が言いたいのは自分をまったく大事に出来ない人だよ」

「なるほど。でも場合によっては一時的にそうになってしまうヒトは居ると思います」

「確かに。もしかしたらヒトと言うのは知恵の実を食べた時に欠陥品となってしまったのかもしれないね。ヒトは知恵で秀でているとは言うがそれ以外では他の生物に劣る部分が多い気がする。まるで生物としての本能や本質の一部と物々交換したかのようだ」

「だとしたら皮肉な話ですね」

「そうだね。こんな話をしている間に月が近づいてきたよ」

見上げると確かに月は近づいていた。気のせいかもしれないが赤が濃くなった気がする。

「意外と時間が無いね。さて、僕たちの正体が分かるかな？ 君が僕達で僕達が君だ」

「実は気付いてたんですよ。最初からね」

「ほう。では何故言わなかったんだい？」

「言ってしまうと……終わる気がして」

「この夢が？」

「そうですね。この夢が長いことは知っていました。そして有限であることも。それに……この夢は私が気付く前から存在してたのですよ？」

「そう。この夢は長いと言ったが、あれは半分嘘だ。この夢は長いではなく長かったと言ったほうが適切なんだ」

「ですよ。確かにあなた達は私だった——いや、私かもしれないかった、と言った方が良いでしょうか？」

「その分だとやはり気付いてたようだね。……そう、私たちは『君の可能性だよ。いや、可能性だったとでも言うべきなのかな？』

「そうですね。……そろそろ月が近づいて来ましたね……やはり……」

近づいていた月はどこまでも赤黒く、全てを飲み込むブラックホールのようにあった。

「やはり、あそこが出口だったのですね」

「外の世界との繋がりはあそこ、君に繋がっている鎖だけだよ。

その鎖ももう少しすれば外れる。後は君があそこから出ればこの夢はおしまいさ」

ジャラ、と鎖の音がした。

「気が付かなければ気が付かないですよ。こういった鎖って」

「もともと、君の場合は気が付かない振りをしていたんだけどね」

「外では外せなくて見えない鎖が多いですからね。ここに居る時だけは無くそうと思ったんですよ。この物理的な鎖以外はなんの鎖も存在しない世界で」

「外の世界は鎖が多いからね。名前ですら鎖と成り得る」

「そんな世界に行ったらきつと泣いてしまいますね」

「贅沢な悩みだね。僕たちはこの世界と共に消えるからね。外には行けないのさ」

「分かっています。……あそこから出れば多分このことは忘れてしまふのですね」

「そう、夢は起きた時にほぼ忘れてしまうものだしね」

「だとしたら、私たちに会ったことも覚えてないのですね」

「残念がらね」

「私が外の世界に行ったら真っ先に泣きましよう。覚えていずともそれくらいは出来るでしょう」

「そうしてくれたらありがたいね。それにしても覚えていないのに泣けるとは……君は役者だね」

「大体の人間は『人生』と言う劇を演じる役者ですよ」

「そうだね……さあおしゃべりの時間は終わりだ。君とはもう会えないな」

「さようなら」

「さようなら」

……………ここはどこであろうか？真っ白な部屋の中で真っ白い人たちに囲まれている。酷く息苦しい。息が出来ない。ここは酷く不快だ。夢が覚めなければ良かった。夢とは……夢とは何だ。覚えていない。

大切なことだった気がする。忘れてはいけない気がする。そうだが、こんなに苦しいのならば忘れたということも今のこの意識すらも忘れてしまおう。全てを0にしよう。そうすればこの世界を夢と比較しなくて済む。この世界は……この世界は……酷く、息苦しい。

私は泣いた。

息苦しさが薄れていくのと同時に記憶が吐き出されていく感覚があった。

多分これから私は夢を見る。

八百万の夢。

誰の夢なのか、誰の為の夢なのか、誰の夢だったのか、誰の為の夢だったのかは知らない。

どっちが夢でどっちが夢じゃないのかはもうどうでも良い。

ただ1つ言えることは、これは夢だ。

——八百万の夢。

(後書き)

解釈は各々の自由です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4814y/>

八百万の夢

2011年11月13日13時11分発行